

京都祇園祭の山鉾行事歴史資料調査

Ⅲ

明治叁拾叁年

鉾町神事當番諸用記録

京都祇園祭の山鉾行事歴史資料調査 III

公益財団法人祇園祭山鉾連合会



## 刊行にあたって

公益財団法人祇園祭山鉾連合会 理事長 木村 幾次郎

鷹山の白木ながらも堂々たる姿が、一九六年のブランクを経て再度蘇り、朝日に眩しく輝き、祇園祭の新しい幕開けを感じさせた昨年の山鉾巡行は、新型コロナウイルス感染症対策の効果もあり、無事に終了することが出来ました。いよいよ令和五年の春を迎えました。大正十二年に関係者の祇園祭に対する熱意の結果として組織された祇園祭山鉾連合会が設立百年を迎える記念の今年、いろいろ変異を繰り返し私たちに苦しみを与え続けた新型コロナウイルス感染症が漸くインフルエンザや風邪と同等の対応になり、今年こそは長い歴史を継承してきた本来の形の祇園祭山鉾行事が出来るようにと準備しております。

さてその当会設立百周年に際し諸先生方にお願しております『京都祇園祭の山鉾行事歴史資料調査 Ⅲ』を刊行いたします。八坂神社所蔵の「維新改正祇園会氏子私祭祀」の解説、明治期の当会所蔵文書の調査、そして函谷鉾町所蔵の文書の調査の結果等を取りまとめいただきました。ご苦勞いただきました先生方に感謝申し上げますと共に、この調査記録がこれからの百年の祇園祭にとって役立つことを願っております

## 凡例

- ・本書は、公益財団法人祇園祭山鉾連合会が令和四年四月から令和五年三月にかけて実施した、歴史資料調査の報告書である。
- ・本事業の調査体制については、巻末を参照されたい。
- ・本書で報告する資料は、八坂神社所蔵「維新祇園会氏子私祭記」と祇園祭山鉾連合会所蔵「祇園祭山鉾連合会文書」である。
- ・本年度の調査に当たっては、八坂神社及び公益財団法人函谷鉾保存会、公益財団法人白楽天山保存会より格別のご高配を賜った。
- ・文書の翻刻については、別に凡例を掲げている。
- ・本書の執筆・編集は、村上忠喜（京都産業大学教授）と下坂守（京都国立博物館名誉館員）、奥田以在（同志社大学准教授）、橋本章（京都府京都文化博物館主任学芸員）、村山弘太郎（京都外国語大学准教授）が行い、祇園祭山鉾連合会事務局と安井雅恵（京都市文化財保護課美術工芸・民俗文化財係長）・福持昌之（京都市文化財保護課文化財保護技師・主任）、今中崇文（京都市文化財保護課文化財保護技師）が補佐した。
- ・本書の掲載写真は、写真工房えむ（真淵紳一）、安井工業写真株式会社  
が撮影した。
- ・本事業は、文化庁の令和四年度地域文化財総合活用推進事業（ユネスコ無形文化遺産）の助成を受けて実施する「祇園祭の文化遺産総合活性化事業」の一部である。

# 目次

刊行にあたって 公益財団法人祇園祭山鉾連合会 理事長	木村幾次郎	1
はじめに	村上 忠喜	4
第一章 京都祇園祭の山鉾行事の近代資料		
「明治三十一年鉾町神事当番諸用記録」解説	村山弘太郎	6
「明治三十一年鉾町神事当番諸用記録」翻刻		13
第二章 八坂神社所蔵資料に見る山鉾行事の近代		
「 <small>維新</small> 改正祇園会氏子私祭祀」解説	下坂 守	134
「 <small>維新</small> 改正祇園会氏子私祭祀」翻刻		137
「 <small>維新</small> 改正祇園会氏子私祭祀」写真		155
第三章 調査記録		
「函谷鉾町保有文書の調査について	奥田 以在	180
「白楽天町文書の調査活動から	橋本 章	184
調査体制		189

## はじめに

村上 忠喜

新型コロナウイルス感染症もようやく落ち着いたというか、感染症ともにある社会生活が日常となったというところが実態であろうが、令和四年（二〇二二）七月には三年ぶりとなる山鉾巡行が挙行され、後祭においては、長年の努力が実を結んで復原が叶った鷹山が巡行参加をみた。

三年ぶりの山鉾巡行に備えて山鉾関係者の方々がご多忙を極められているなか、本調査の準備も進められた。大変な忙しさのなかで調査準備の便を図っていただいた祇園祭山鉾連合会事務局や、調査に協力いただいた保存会など関係者の方々に篤くお礼を申し上げたい。

令和二年（二〇二〇）、同三年（二〇二一）の二年間とは違い、今年度から山鉾連合会所蔵の記録類に加えて、「函谷鉾町文書」と「杉浦家（一力亭）文書」の調査を、年度下半期から行うことができた。

「函谷鉾町文書」は多くの文書記録類を有する山鉾町のなかにおいても、その質量の豊かさについては従前から認識はしていたものの、いざ調査をしてみれば予想をはるかに超える分量であり、今年度中にすべてを終了することはできなかった。また明治初期の祇園祭礼復興にも深くかわられた、杉浦家の文書の調査も進めることができた。今後の成果が楽しみである。

今年の事業報告は、翻刻としては、山鉾連合会所蔵の記録である「明治三十一年鉾町神事当番諸用記録」と八坂神社所蔵の「維新改正祇園会氏子私祭記」

のふたつを掲載させていただいた。前者は、昨年度の報告書で翻刻した「明治九年鉾町々神事諸用記載帳」の続編といふべき性格を持つもので、明治三十一年（一八九八）から大正十五年（一九二六）にわたる、各年の鉾当番がその年の祇園祭山鉾巡行に関わる事務的な事項を記録した綴りである。電線やガスパ管の敷設、そして市電の開通など、京都が近代都市として変貌する時期における、「伝統的な」祭礼行事や祭祀儀礼がどのように時代に対応していったのかについて知ることができる資料といえる。昨年度の報告書にも記したが、少なくとも明治期から大正期の山鉾町には、鉾組と山組というつながりがあった。この資料は鉾組の当番町が、その年の巡行に関する記録を認め、それを過年の記録に添えて次年の当番町に送った引継ぎ文書であり、途中の経緯は不明ながら、山鉾連合会に永く保管されてきたものである。

いまひとつの資料である八坂神社蔵の「維新改正祇園会氏子私祭記」は、明治五年（一八七二）から開始される氏子祭についての記録である。近代化による伝承の危機は、京都という都市の変貌だけでなく、政治体制の変革からもたらされた。それまで山鉾町による資金集めの慣習であった寄町制度が政府によって廃止され、山鉾巡行は継続の危機に陥った。本資料には、明治五年当時、下京第一一区の副区長であり、山鉾巡行や神輿渡御の経済的支援制度の設立に尽力した、土田作兵衛の手記が含まれる。幕末の動乱から明治維新という激動の時代に、祇園祭を支える人々がどのように対応していったかの一端が知れる。

それに加えて、現在調査中の函谷鉾文書調査、および令和二年度から写真撮影を行ってきた白楽天山町文書調査の経過報告を掲載した。